

生涯學習情報誌

Life Learning

2016
Dec.
NO.316



祝

2015年9月 新潟大学博士号(学術)取得

峯村昌子さん(取得時59歳)

【論文テーマ】ホルモン補充療法(HRT)の日本での普及と情報源の関係〜働く女性への質問紙調査から〜

健やかな人生と活気ある社会のために、メディアと社会の良い関係を

峯村昌子さんは、大学卒業後サンケイ新聞社(現産業経済新聞社)に入社するが、11年目に母親の介護のため退社を余儀なくされた経験を持つ。母親の死去に伴い再入社。現在はサンケイスポーツの文化報道部編集委員として、観光、トレンド、地域、医療、経済などを網羅した「大人くらぶ」を企画立案、取材、執筆するなど活躍している。

メディアの人間として、発信した情報がどう伝わっているのか。本場に伝えたいことが伝わっているのか、ずっと気になっていた。メディアと社会の関係を検証し今後に生かすために、2009年に早稲田大学大学院に入学し研究を開始。その後、女性の更年期という医療に関するテーマを研究素材としたこともあり、博士課程は新潟大学歯学総合研究科に移り、月1回程度、週末に上越新幹線で通学しながら博士論文を仕上げた。

■報道の偏りが普及を阻害した可能性

政治や病気をテーマにすると、思想や個人差による偏りが出易い。だが、更年期はすべての女性に訪れる転機で、情報の伝わり方がシンプルに見え易いと考え、ホルモン補充療法(HRT)を素材とした。

50歳前後とされる更年期の体調不良を緩和するホルモン補充療法は、欧米では対象年齢女性の約45%が取り入れているのに対して、日本では2%程度しか普及していない。その原因のひとつにマスコミ報道があった。米国立衛生研究所が2002年に、「5年以上の授与で乳がんのリスクが25%増加する」と発表。日本のマスコミもセンサーショナルに報道

した。その後、その研究が不正確だったことがわかり撤回されたが、その経緯や国際的なホルモン補充療法の再評価については、きちんと報道されてこなかった。

■正しい健康情報への関心の低さに驚き

研究対象は、都市部で働く40代から50代なかばの女性。手渡して説明しながらの丁寧なアンケートをもとに研究を行った。その結果わかったのは、ホルモン補充療法の普及の低さは、マスコミの偏った報道以上に、皆、自分の健康に関心が薄く、情報を持っていないことだった。更年期については、女性同士でもあまり話をしない。我慢していれば自然に治る、ホルモンというよく知らないものに手を出したくないといった意識も見えた。

「50歳は女性に限らず男性も、体調や仕事の立場



現在、早稲田大学公共政策研究所招聘研究員の立場で研究を継続し、無償で授業や講演を引き受けることもある。

などが変化する時期。ここで心身を健康に保つことで、20年、30年後も健やかに生きられるのです。メディアは関心の喚起とともに、正しい情報提供をその責任があります。読者の側も、自分に都合の良い話だけでなく、多方面から情報を得てメディアリテラシーを上げることが大切で、それが個々の健康や社会の活気にもつながるはずですよ」

■出産・子育てに匹敵する更年期女性の大変さ

「男女雇用均等法が始まって約30年、その頃就職した女性が更年期にぶつかっています。仕事の生産性が落ちたり、私生活では、親の介護があったり、子供が思春期だったり、独身者もこれからどう生きるかなど、ターニングポイントなんですね。社会的にも私生活でも影響が大きいのです。ところが国会の女性の働き方支援の議論でも、子育てで終わっています。女性が活躍する社会にするためにはその先があることを訴えたいです」

研究成果は記事制作に活かす他、「医療者とメディア」というテーマで、年2回、看護学部の学生に向けた授業を受け持つ。医師以上に患者とふれあう機会が多い看護師に、まず医療者が正しく情報を伝える大切さを説いている。

「人間の脳は違う分野で使えば使うほど、何歳でも発達するのだそうです。学び直しはいつからでもできます。いま博士号に挑戦中で苦しい思いをしている方も、そこを乗り越えれば、苦しみの何十倍もの実りが得られますよ。自信がついて可能性が広がります。がんばってください」

ムダなたくさんさんの種まきから、独自の作風を生み出す



中野月白瓷四方鉢
(2016年)



陶芸 福島善三

Fukushima Zenzo

- 1959年 小石原焼 窯に生まれる
 1988年 第35回日本伝統工芸展にて入選、以降26回入選
 1991年 第26回西部工芸展にて朝日新聞社金賞受賞
 1999年 第15回日本陶芸展にて大賞桂宮賜杯受賞
 2000年 宮内庁お買い上げ「鉄釉掛分鉢」、以降3回お買い上げ
 2003年 第23回西日本陶芸美術館展にて大賞受賞
 第50回日本伝統工芸展にて日本工芸会総裁賞受賞
 2004年 第14回MOA岡田茂吉賞優秀賞受賞
 2013年 第60回日本伝統工芸展にて高松宮記念賞受賞
 東京国立近代美術館工芸館「工芸からKÖGEIへ」に出展
 紫綬褒章受章
 2014年 東京国立近代美術館収蔵



聞き手:上野由美子(左)

古代オリエントガラス研究家。UCL(ユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドン)考古学研究所在籍中。2012年国際日本伝統工芸振興会の評議員。ARTP副団長として王家の谷発掘プロジェクトに参加(1999年~2002年)。聖心女子大学卒業論文『ペルシアガラスにおける円形切り装飾に関する考察』、修士論文『紀元前2000年紀に於けるコア・ガラス容器製作の線紋装飾に関する考察』ほか、執筆・著書多数。

1989年に福岡県朝倉村小石原村字中野で発掘された「上の原古窯跡」は、1682年頃の窯跡と考えられている。その窯から代々伝わる(ちがいわ)窯の16代当主・福島善三さん。福島さんは、陶土、釉薬の原料となる長石、木灰、藁、鉄鉱石など、原材料のほとんどを小石原の地で調達し、しかも、クセのある独特の陶土から自分で粘土を作り、轆轤を廻す。独自の釉薬も作りそれにかけて窯を焚く。すべての工程を自ら行い、高く評価される中野月白瓷などの作品を生み出している。

—福島さんの青瓷は薄くてシャープな感じですね。
 購入(釉薬表面の細かいひび割れ)が入ると柔らかく見えるのですが、皆さんやってらっしゃいますので、逆に購入がないのを独自にしてみよう。

例えば、焼くと粘土は約15%、釉薬は約25%縮むとします。縮みの差で購入ができるのですが、その差をなくしてシンプルに粘土と釉薬を魅せている感覚ですね。小

石原の粘土は元々細かいのですが、それをさらに濾して
いくと白い土がどんどん落ちて黒くなり、収縮率約25%
の粘土ができるんです。さらに、そこにあえて砂を混ぜ
て収縮率を調整することもあります。

——「中野月白瓷」と名乗っていますね。

このあたりは長く中野と呼ばれていて、うちの粘土山
の地番も役所で見ると中野になっています。中野の粘土
は独特で、鉄分が多く焼くと黒くなります。バックが黒
いと色が出てくれません。そこで釉薬に藁の灰を入れま
す。藁シロと言ってそれを入れると釉薬が白くなるん
です。鉄分の還元焼成なのですが、一般的な青瓷の場合
水に鉄分を入れる感じ、私の技法は牛乳に鉄分を入れる
ような違いがあります。釉薬は5、6回かけます。釉薬
が厚いほど色が白くなるのです。中国にも月白釉とい
うのがありますが、それはもつと陶器っぽいですね。

——最初から青瓷ではなかったのですか。

最初は緑の鉄釉です。その後赫釉、中野鉛釉などがあ
り、今は月白です。一度賞をもらおうと同じ作風の仕事で
はあまり評価されません。賞だけが大事ではないけど、
新たな表現にトライするきっかけになります。青瓷のよ
うなシンプルに美しいものは、簡単そうで難しいです。

今までは曲げないように曲げないように作っていたの
ですが、今年は逆に曲げてやろうと思って、何てことす
るんだと批判もありますが、挑戦しています。ベースは
轆轤で、作ったあとに焼いて曲げるんです。ここの粘土
は手びねりだと切れて作れないんです。だから伝統的に
轆轤で作るしかないんですね。

——やはり子供の頃から始めたのですか。

小学校1、2年生からです。でもうちの親は、頭で
っかちになるのを嫌ったのか、大学は美大ではなく一般
の大学に行けど。おかげで学生時代は遊んでばかりで、
「誰々さんの個展やってくるから見てこい」と言われても



中野鉄土鉛釉壺 (2016年)



赫釉匏壺 (2016年)

小石原独特の飛鉋の技術を活かした文様も採り入れている。

中野月白瓷掛分鉢
(2016年)



第63回日本伝統工芸展 高松宮記念賞
中野月白瓷深鉢 (2013年)



第50回日本伝統工芸展 日本工芸会総裁賞
鉄釉掛分条文鉢 (2003年)

行きませんでした。帰ったら嫌でも仕事しなくてはいけ
ないんだからと(笑)。

友人たちが就職活動で相手してくれなくなってから、
全国の窯を見て回りました。すると、小石原は轆轤が
うまいなと思って、よそで変なクセ付けるより家で習っ
たほうがいいと思い戻りました。

——小石原焼は「飛鉋」や「刷毛目」が特徴ですが、なぜ
違った作風を選んだのですか。

柳宗悦が「九州の山奥に中国古来の飛鉋が残っている」
と言ったものだから、ずっと伝統的に続いていると思わ
れがちですが、祖父や父に聞くとほとんどは昭和初期に
始めたんです。柳宗悦やバーナード・リーチのおかげで
小石原焼は栄えました。昔の小石原は「分家ならず」と
いう掟があり窯は8軒だけだったので、民陶ブーム
で脚光を浴びたこともあってそれがなくなり、私が大学
から戻ったときは40軒に増えていました。私は皆と同じ
ことをやるのは面白くないと、伝統工芸展に出し始めた
んです。飛鉋や刷毛目にとられないで、自分が良いも
のを作ってあげば、いつかそれが伝統工芸になるのでは
ないかと考えました。

祖父や親父の時代は、親方は指揮者だったんですよ。
すべて分業になっていて、轆轤も専門職人だった。自分
は全部一人でやっています。とにかく自分で轆轤を回す
のが大好きなんです。飛鉋や刷毛目という前に、小石
原は伝統的に轆轤の技術が高いと思っています。

——独自の作風はどうやって生まれるのですか。

お客さんの立場で考えると、同じようなものばかりよ
り、違う作風があったほうがいいでしょう。私はいつも、
試行錯誤、ムダなことをたくさんしておくんです。すべ
て実を採らないで種まきを繰り返す感じです。皆そうだ
と思います。9割は失敗しています。いかにムダをし
て、あきらめないかが肝心です。

若手コンサルタント個々の可能性を引き出すために

新田雅史さんは、以前は人材紹介会社に勤め、キャリアコンサルタントとして転職支援をやっていた。キャリアアカウンセリングの理論を学び、多くの実践を積んできたにもかかわらず、あらためて「認定キャリア診断士」の資格を取得したのは、どういう背景や目的があったのだろうか。

■高いレベルの質問力や助言力が身についた

現在勤務するスカイライト コンサルティング株式会社は、クライアントの課題に対して分析・提案をするだけでなく、協働型、あるいは伴走型で、一緒に目的達成を目指すスタイルを得意とする。

同社で人材開発担当マネージャーを務める新田さん。当初は中途採用を担当していたが、2007年に人材開発という部署を立上げ、プロジェクトを終えたコンサルタント社員と面談をして、次に参画したいプロジェクトの希望や、そこにどうつなげるかを共に考えるキャリア面談制度を導入した。キャリア志向の強いコンサルタントをカウンセリングするには、もう一度体系的に学び直す必要があると考えていたところ、社会起業大学に通う同僚から田中勇一学長を紹介され、相談を兼ねて訪ねたのが受講のきっかけだった。

社会起業大学では、「認定キャリア診断士」とは、多様化・複雑化した環境下において、生き方・働き方の指針となる軸をクライアントと共に創り上げられるキャリアの専門家」と位置づけ、そのために必要な5つのスキル、共感力、診断力、質問力、助言力、動機力を講座において身につける。

「新たに学んだのは、キャリアアンカー（各々が



スカイライト コンサルティング株式会社
管理本部 人材開発担当マネジャー

新田雅史さん

会社設立からまだ2年目の2002年に入社。当時約50名だった社員数は現在は130名を超えるが、その多くの採用にも関わってきた。「Brightening Your Way」は、社であると同時に、人材開発マネージャーである新田さんの、スタッフに対する思いそのものだ。

どうしても譲れないキャリアの不動点」という考え方とその探り方。スキルとしては、カウンセリングの質を高めるための質問力や助言力を高めて、そのアプローチのしかたや人を見る視点などを磨くことができました。また、全く違うバックグラウンドを持つ他の受講生との演習を通じて、多様な価値観や考え方に触れ刺激を受けました」

■社員が刺激し合うパフォーマンスの高い会社に

受講後は、社員との面談で、彼らのプロジェクト経験を単に振り返るだけでなく、その意味付けに重

点を置き、どういう価値を生み出しどういう貢献につながったのかを、対話の中で引き出そうとしている。今後のキャリアの話をする際も、本人の自発的な言葉を引き出し新たな可能性に気づいてもらえるよう、傾聴するスキルを活用できるようになってきたという。

「社員の声を聞いていく中で、様々な傾向やトレンドが見えてきます。世代間ギャップや国籍による意識の違い、個々の潜在能力の多様性。そうしたことを会社全体のパフォーマンス向上につなげるよう活かしていきたいです」

同社では、若手社員も刺激しあっている。サッカーの東京ヴェルディと資本提携して進める育成プロジェクトは、新卒社員が自身の経験と人脈で作ったきっかけをもとに事業化されたもの。また、あるインド人社員は、学生時代から温めてきたジュエリービジネスで現地法人を立ち上げた。

■長寿社会の新しい生き方も提案できれば

今後の長寿社会では働き方がより多様化すると予想される。転職はもちろん、2つの仕事、社員でも2枚の名刺を持つケースも。定年まで同じ会社に勤めても、セカンドキャリアを望む人が多数だ。そのため資格取得も活発化するだろう。

「キャリアを見直したり、そのために学び直したりする際、やってきた仕事を振り返りながら意味付けてみることで、キャリアアンカーを意識することで見えてくるものがあります。そうしたバリエーションや掛け合わせの形で、自分が関わる人たちに新しい生き方を提案していければ面白いですね」